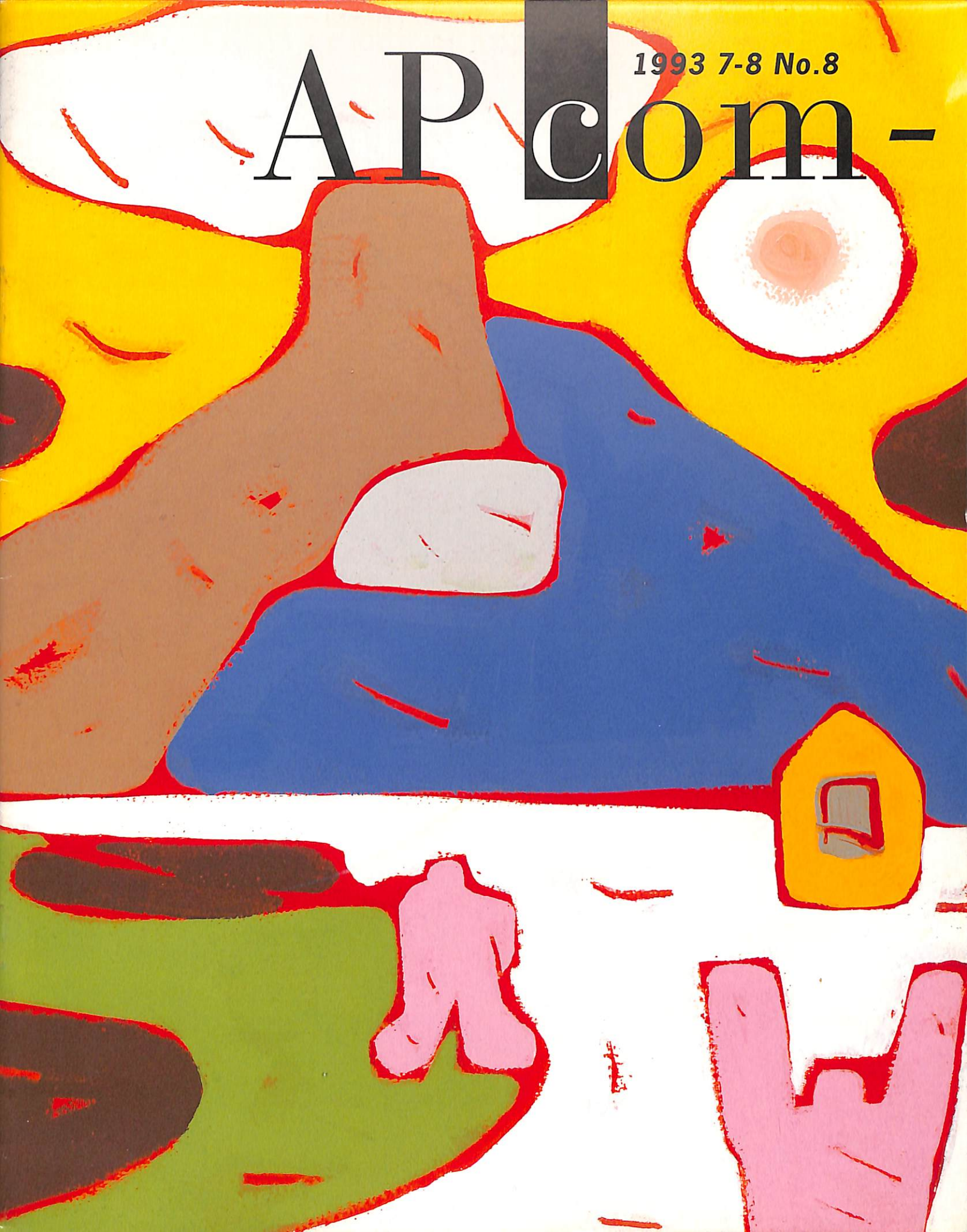


APcom-

1993 7-8 No.8



フェズ：アラブ・イスラームの共同体都市



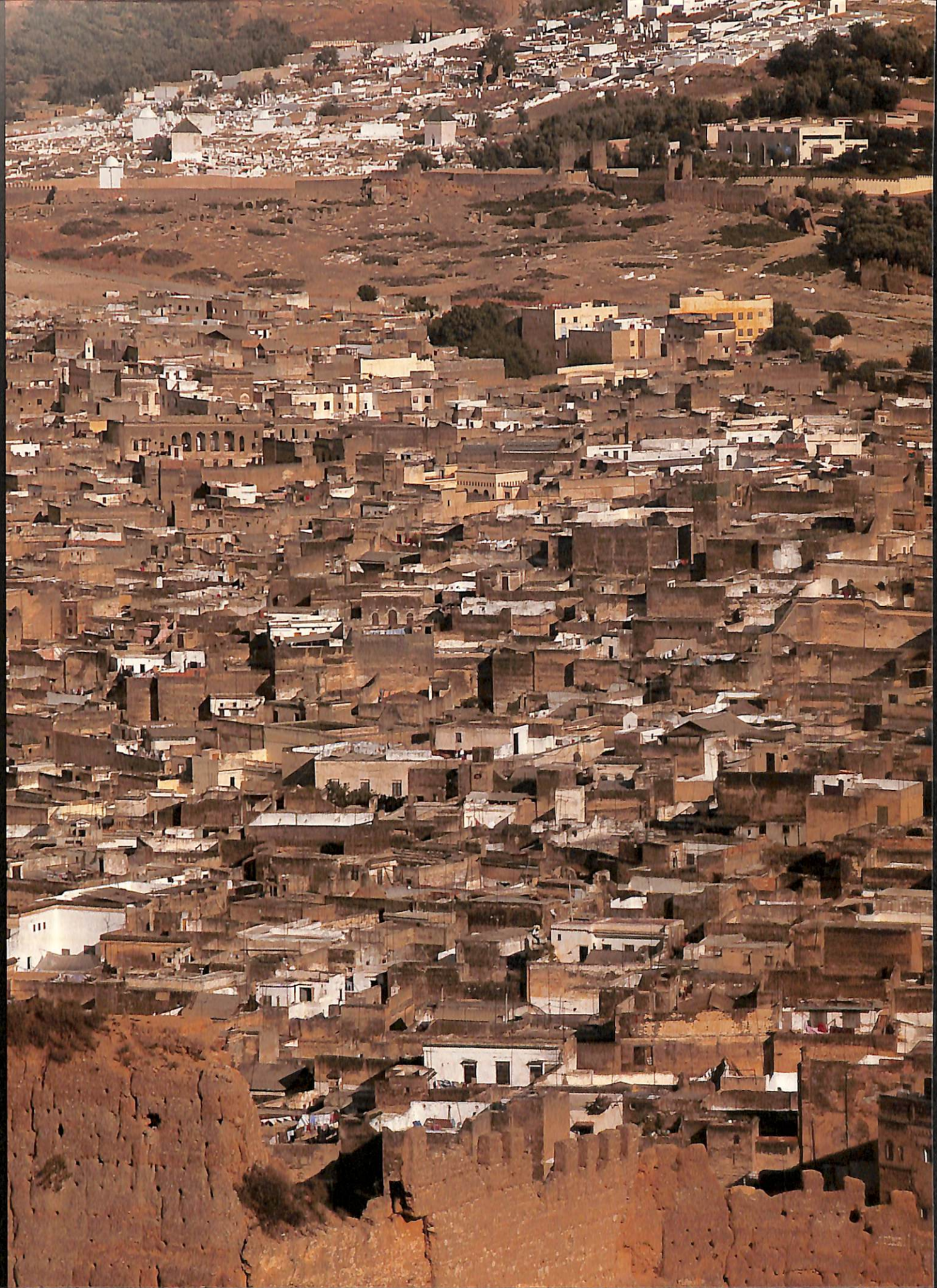
FÈS

地中海に面した北アフリカの国、モロッコ。
 ここにはアラブ人がもちこんだイスラームの香りが色濃く
 漂っている。なかでも9世紀に建設された古都フェズには、
 当時の伝統的なアラブ・イスラームの市街がそのまま残され、
 一大迷宮都市メディナを形成している。
 今号の旅は、世界一の迷路へ、
 謎めいたメディナの世界へと、分け入ってみた。



1. カラヴィン・モスク
2. マドラッサ・セファリン
3. マドラッサ・シェラティン
4. マドラッサ・アタリン
5. ムーレイ・イドリス廟
6. マドラッサ・ブー・イナニア
7. フー・ジュールド門
8. バトハ博物館
9. 糸染めのスク
10. 革染色工場
11. アンダルー・モスク

城壁の市門をくぐるとメディナの迷路へ
 次頁：丘の上から眺めたフェズのメディナ。
 建物が覆いかぶさるように密集している



CONTENTS

1

AP com-REPORT
 世界の建築文化を訪ねて ⑧
 フェズ／アラブ・イスラームの共同体都市

13

モロッコの
 都市と建築を知るキーワード

15

AP com-AREA STUDY
 販売店のあるまち ⑧
 愛知・名古屋千種区 株式会社油久

19

AP com-FORUM
 ARCHITECTURE VIEW UP
 皇宮保田宮第一団地
 藤波邸

23

INFORMATION
 YKK R&Dセンター完成
 新規車両デザイン
 電装商品サービスシステム、スタート
 日本人デザイナー展、ミラノで開催

AP com-7.8月号 No.8
 発行：YKKアーキテクチュラル
 プロダクツ株式会社
 〒130 東京都墨田区亀沢3丁目22番1号
 YKK R&Dセンター
 tel.03-5610-8166 fax.03-5610-8167
 編集：AP com・編集室
 印刷：株式会社日刊スポーツ印刷社
 発行日：1993年7月20日
 制作協力：株式会社I&S
 株式会社アルシーヴ社
 AD：伊丹友広
 デザイン・レイアウト：イットイズデザイン
 表紙イラストレーション：富沢天

写真：普俊均 文：編集部

メディナの眩暈

メディナというのは、アラブ・イスラームの伝統的な

都市の形態をとどめている旧市街のことをさす。フェズの

メディナはモロッコ最大の規模を誇り、世界でもっとも複雑な

迷路のような都市だ。
城壁に囲まれた周囲10kmほどのメディナの中には、
古い家々が密集し、ロバや馬が行きかい、中世そのままの
雰囲気をかもしだしている。

迷路のようなメディナはガイドなしには歩けないという話を聞いた。実際にガイドブックにもそう書いてある。なるほど、地図を広げると、細くて頼りない線がくねくねと折れ曲がり、途中で切れてまた続き、まるでそこないの葉脈標本のようだ。どれもこれも、手抜きしたとしか思えないような地図ばかり。ならば、と用意周到に磁石まで準備して出かけていったが、地図はもちろん、磁石も何の役にも立たなかった。

コインランドリーにある乾燥機の、あの回転ドラムの中から出てきたような感じ(実際に入ったこともないのに、それをたとえにするのはおかしいけれど)……第1日目、ホテルに帰り着いた時は、そんな気分だった。ベッドに倒れこみながら、あれは一体何だったのだろうか、と思う。あれとは、もちろんメディナのことだ。

たしかにうさぎ以上の迷路。肩がぶつかりあう狭い路地は、右に折れたかと思うと左に折れ、谷底に降りていくかのような下り坂になったかと思うと、路上にまたがった住居のために闇のトンネルになり、また光の中へと上昇する。左右に折れ曲がるだけでも方向感覚が失われるのに、土地の起伏によって上下にも揺さぶられ、光から闇へ、闇から光への不意打ち目くらまし攻撃をくらって、完璧に混

乱してしまうのである。

まちの熱気が混乱に拍車をかける。すさまじい雑踏と喧騒。間口1間ほどの店がズラリと並ぶ通りには商品がひしめき、頭上にパン生地をのせた子供が走り抜ける。羊の頭が並ぶ肉屋。生きたままのにわとりを売る店。金属製品に彫り物を施す音。ほんやりしていると荷物を背負ったロバや馬のしっぽで頬を打たれ、人混みに押し戻されそうになる。過剰なまでの匂いと音、人いさけ。

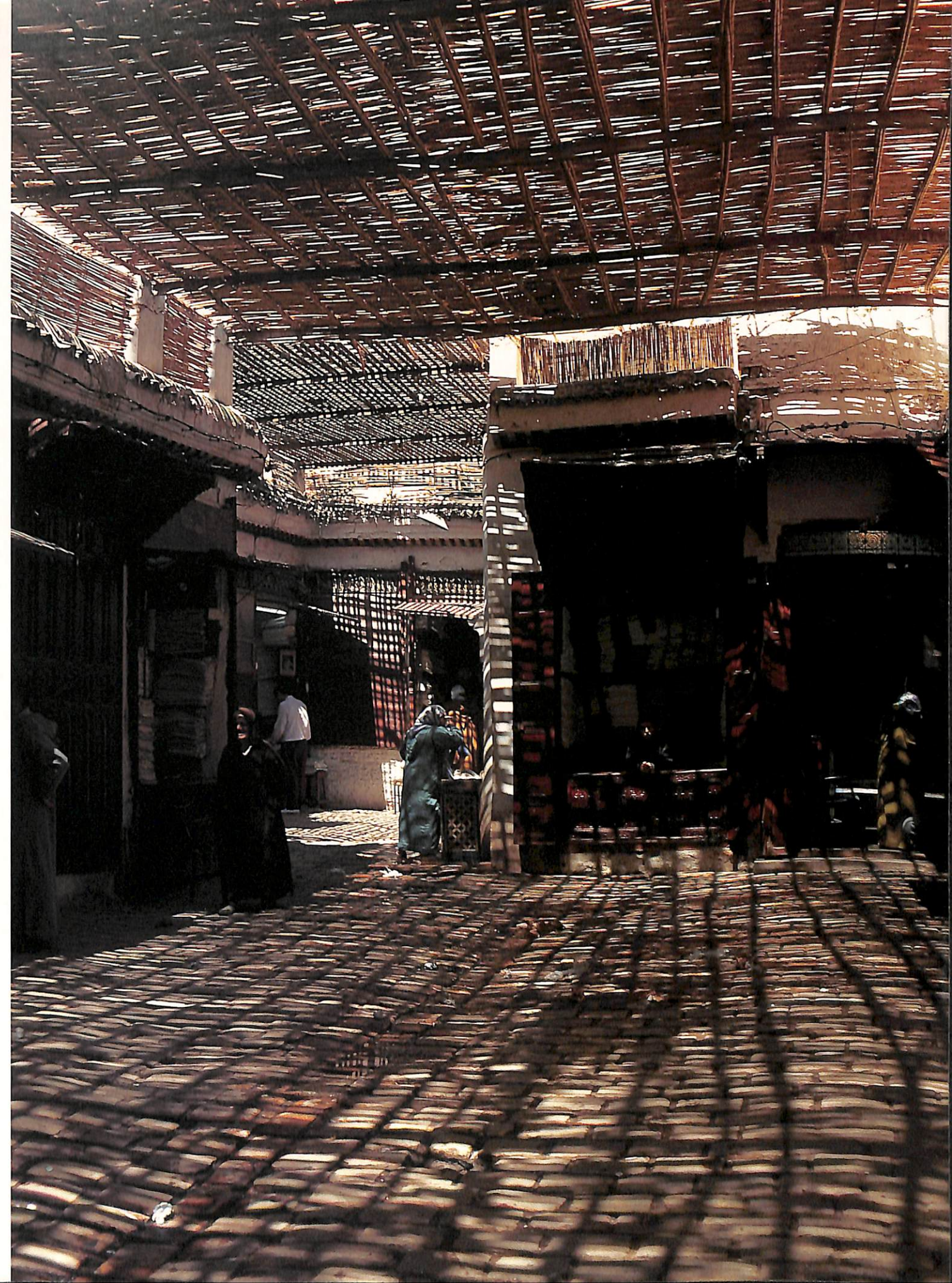
東西3.6km、南北1.5kmというこの狭いメディナの中には、約31万もの人々がひしめきあって暮らしている。これらの人々の営みのすべてが交錯し、重なりあって、狭い路地にあふれかえっているのだ。

もう、もと来た道もわからない。同じところをグルグル回っているような、いないような……。頭の中までが迷路になったかのような思考回路の分断。麻痺。濃密な空間にあぶられて、あらゆる感覚が気づかないうちに攪拌されてしまう、と言えいいだろうか。

ここでは二次元の地図や磁石は用をなさない。高度なアラビア数学や天文学のように、地図を自分の内部で三次元化する空間感覚を持たない限り、メディナは永遠に迷路であり、コインランドリーの乾燥機の中の衣類のように、熱風にあおられて眩暈を感じ続けるしかないのだ。



左、次頁共：スーク(市場)が並ぶ中心部。
竹の簾を使った日よけが、光と影の美しいパターンをつくりだす
右上：2階からつきだした住居が空をふさぎ、まるで谷底を歩いているような気分
右下：人ひとりがようやく通れるほどの路地が、メディナの中には迷路のようにはりめぐらされている



等身大の共同体

生産・商業・宗教・文化・メディナの中にはあらゆる都市機能が
集約・融合されている。人々の生活はすべて徒歩圏で
完結するのだ。機能分散型の現代都市が置き忘れてしまった
ヒューマンスケールが、都市の原形が、
ここでは生き続けている。

メディナという都市空間が、はじめての旅行者にひきおこす混乱。それはあくまでも混沌であって混沌ではない。あまりにも不規則に枝分れする路地、お互いにつっかい棒でもたれあっている壁、路上に公然とはみ出して増築された部屋……一見、勝手気ままに増殖を繰り返しているだけの混沌とした都市のように見えるが、しばらく歩いていると、メディナの都市構成が、じつはかなり秩序的につくられていることが徐々にわかってくる。

まずメディナのほぼ中央には、金曜モスクとも呼ばれる金曜礼拝の行なわれる大モスク。その周囲にはマドラサ(イスラームの高等教育機関)。日常礼拝用の小さなモスクはなんと270近くも散りばめられ、1日5回繰り返される礼拝の、人々の暮らしを支配する宗教の、結節点をつくりだしている。大モスクの周辺には、同業者ごとにまとまって軒をつらねるスーク(店舗が並ぶ市場)。そして、よその地からやって来る商人や手工業者たちの仕事場兼宿舍のキャラバン・サライ。大モスクに最も近いスークにはろうそくやコーランの店、騒音や悪臭が伴う金属の打ち出し工房や革なめし工場は離れたところに配置するといった具合に、イスラームの原理に基づいて明確な都市づくりがなされているのだ。

都市機能としても、高度に複合化されたものを備えているといってもいいだろう。かつての首都であったフェズは、政治・宗教・文化、そして商業・生産の中心地であった。その役割は今も変わらない。わずか周囲10kmの中で、都市機能のすべてが行なわれ完結されるのだ。これは、機能が分散された大都市に住む者にとっては、驚異的なことでもある。とく

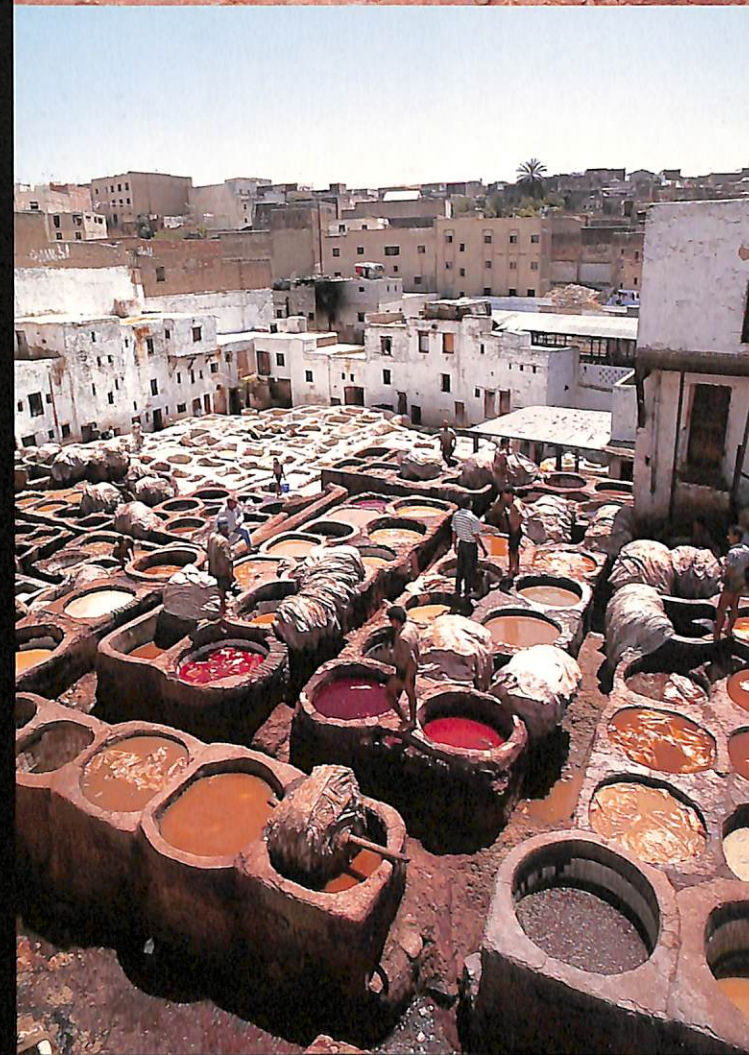
に生産の現場から隔離された我々には、大きな衝撃といってもいいだろう。羊毛を紡ぎ、染め、カーペットを織る。鍋釜の打ち出し。家具づくり。機織り。陶器の製作。衣類の縫製。手工業領域のすべての生産活動が、目の前の店舗や工房で行なわれ、出荷され、販売される。つくっている現場そのものを商品化しているようにも見える、都市と生産の奇妙な融合。香ばしい匂いに誘われて路地に入ればパンの焼き釜があり、リズミカルな音にひかれてドアをのぞきこむと機織り工房があったりする。匂いや音に誘導されて路地を歩くうちに、これは芸術的ともいえる、都市の巧妙な装置なのだと気づかされる。暗転が矢つぎ早に繰り返される舞台のように、迷路の先々に魅惑的な装置が仕掛けられているのだ。建築家で批評家でもあるパーナード・ルドフスキーは、『建築家なしの建築』の中で、共同体がつくりだした風土的な建築をこう指摘している。

「二、三の知識人や専門家によってではなく、伝統を共有し、経験の共同性に基づいて働く、全住民の自発的継続的な作業によって生み出された共同芸術である」と。

フェズのメディナは1000年前とスケールも変わっていない。城壁を壊して都市を拡張しようと思えばできたであろう。しかし、あえてそうしなかったのは、際限のない拡張が都市空間を無性格で空虚なものにしてしまうことを、等身大の共同体に生きてきた人々が予感していたからかもしれない。イスラームの伝統と共同性が支配するメディナは、都市の原点、あるいはヒューマンスケールという観点からみても、優れて現代的な都市のひとつだということができるだろう。



左：城壁に沿って並ぶ市場。生活の匂いが通りに充満している
中：メディナの中へはクルマは入れない。交通・輸送手段はいまだに口バと馬
右：あちこちにある水場、人々の生活用水であると同時に、家畜の水飲み場でもある



上、左共：路地の奥に広がる革の染色工場。生皮の強烈な匂いと鮮やかな色が、目と鼻を直撃する
中上：川沿いの路地に並ぶ糸染めのスーク
中下：リズミカルな音にひかれて中を覗きこむと、中庭に機織り工房が。職人は舞台の上のミュージシャンのようだが、聖廟や宮殿の天井を飾る木の浮き彫りを彩色している。
ここでは全員がアルチザン

外に閉じ、内に開く空間

他者を寄せつけないかのように続く路地の壁、壁、壁……
しかし、壁ひとつ隔てると、
そこにはオアシスのような中庭が広がっている。
空間を開いてこむこと……遊牧の民から受け継いだこの手法は、
光の海がすべてを平均化するこの土地に、
もっとも適していたのだ。

シェスタの時間になると、メディナの様子は一変する。商店は重い木の扉を閉じ、今までの雑踏と喧騒がうそのように静まりかえる。人影のない路地に光だけが降り注ぎ、濃密な都市の息づかいは乾いた風に吹き飛ばされて、ただ茫漠とした光の海が広がるばかりだ。路地の両側に続く壁は、すべてを拒絶するかのように、無機的な表情を深めていく。入り口がどこにあるのかもわからないほどに閉ざされ、防御された壁。しかし、この壁の向こうには、外側の無機的な表情からは想像もつかないような世界が広がっている。住居内のオアシスとでも呼べばいいだろうか、優しく包みこむ中庭が待ち受けているのだ。裕福な家では、中庭にモザイクタイルが敷き詰められ、緑の樹木が繁り、泉が配置されていたりもする。屋上から眺めると、いたる所に四角い中庭がポツカリと口をあけ、空に向かって開放されているのだ。

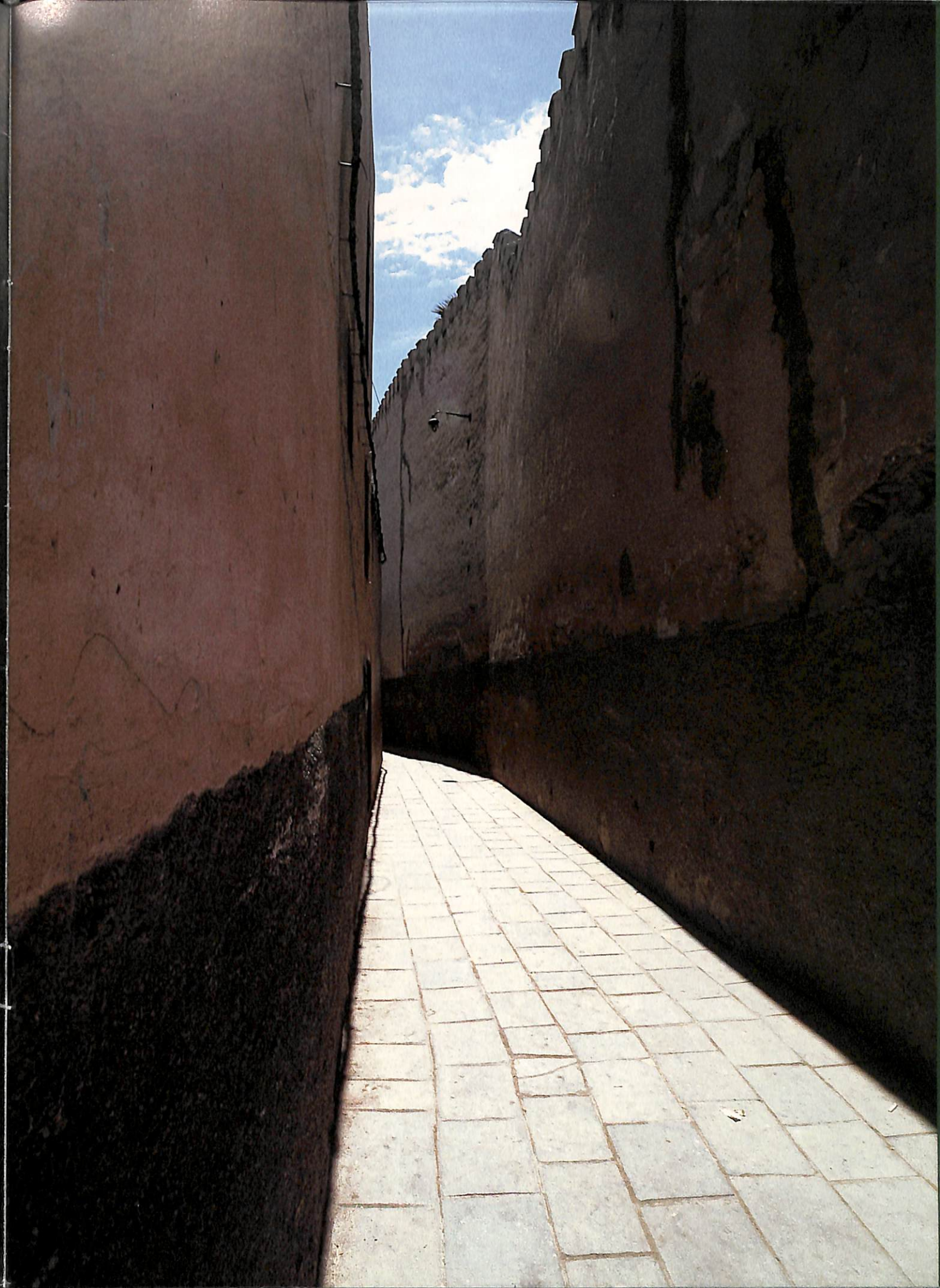
アラブ・イスラーム都市では、モスクから住宅に至るまで、あらゆる建築物が中庭を中心として構成されるといっていいだろう。ここでは、すべての部屋が大きく開かれる中庭側が「表」であり、路地に面した入り口側が「裏」となるのだ。中庭を開く建物は、いつもどこかしらに日陰をつくりだし、人々に憩いの場所を提供する。

こうした中庭構造には、遊牧の民であったアラブ人の天幕での生活の知恵が受け継がれているのだろう。広大な砂漠にテントを張りめぐらせて熱風と砂塵から身を守り、風向きに応じて天幕のかたちを変えながらも、テントで囲った内庭に常に日陰をつくりだしてきた工夫……

イスラーム建築における中庭は、敵の侵入を防ぐために道路側が壁化されたことへの対置であるとか、イスラームの楽園思想の具現化だとも言われている。たしかに、コーランに出てくる楽園のイメージは、水と緑と、涼気な木陰だ。しかし、光と闇が強烈なコントラストで交錯するこの都市を歩いていると、苛酷な光を拒むこと、闇を獲得することが、内なる空間をつくるにあたって不可欠な要素ではなかったのか、という気がしてくる。たとえば、光にあふれた路地からドアをくぐり、闇の底から這い上がるようにして階段を上ると明るい中庭が開けるといった、外から内への巧妙なアプローチを見ると、階段の闇が、場の転換を、内への方角を示す役割をはたしているからだ。光から闇へ、闇から再び光へ。しかし、この再びの光は容赦ない光ではなく、中庭に取り込まれた穏やかな光へと転位されているのだ。



左：左右から壁が急速に迫ってきたかと思うと、この先は袋小路
中：頑丈な木の扉は、身をかかめないと入れないほど低い。向かって左上方に、「ファティマの手」と呼ばれる魔除けがついている
右：中庭によって空は四角に切り取られ、天に向かって空間は開かれていく
次頁：えんえんと続く壁の連なり。このすぐ内側が住居になっているとは信じられないような、閉じられた街路



MOSQUE

アラブ・イスラーム建築の集大成ともいえるモスク。
ここでも中庭が絶妙な感覚で取り込まれ、
無限に開かれた聖なる空間をつくりだしている。

モスクの無限空間

唯一神アッラーのもとにどう人々が、日々集まって祈りを捧げる聖なる空間、モスク。フェズのメディナには大小270ものモスクが点在していると先に触れたが、その中心になるのは、912年から933年にかけて建設された北アフリカ最大の規模を誇るカラウィン・モスクである。

間口80m、奥行き65mの1街区を占めるこのモスクは、毎金曜日正午の集団礼拝のときに限って、周囲を取り囲む路地に面した14の扉がいっせいに開かれ、その聖なる空間を垣間見ることができる。

モザイクタイルが敷きつめられた中庭に面して、アーチのかかる広間が開かれていて、その奥に200本もの列柱が林立する礼拝ホールが闇の中に融けこもうとしている。さらにこの奥に、メッカの方向を示すミヒラブがあって、時間になると全員がいっせいにこの方向に向かって礼拝を開始するのだ。中庭から広間、礼拝ホール、さらにミヒラブへと向かう境界はあいまいで、空間は無限の広がりを見せている。と同時に、光の中庭から中間領域の広間、闇の礼拝ホールへと移行する光と闇のグラデーションは、唯一神アッラーへと収斂される方向性をあきらかに指し示しているのだ。無限の広がり神への力学を同時に表現した、この空間の見事さ…。

ごく初期のイスラーム教は、現在のようなモ

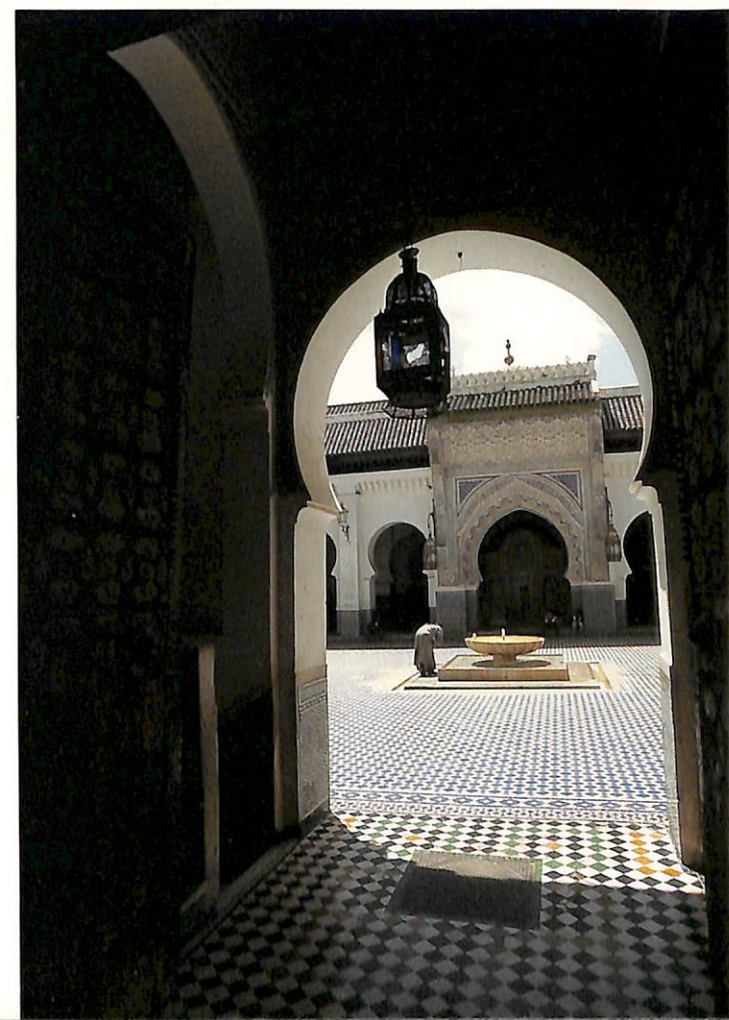
スクを持っていなかった。マホメットが622年にメジナに移ったときに、日干しレンガで四方に壁をつくり、そこを祈りの場所にしたのがモスクのはじまりだったという。偶像崇拜を否定するイスラーム教は、キリスト教のようなイエスやマリアの像を必要としない。だからついでに祈る場所は、屋内でも野外でも、とりあえず多くの人が集まれるスペースがあればよかったのだ。モスクの原形が、ただ開かれただけの内庭であったという事実。このことは、アラブ・イスラーム世界の独特な空間感覚を示唆している。

我々の想像をはるかに超えるような苛酷な自然条件のもと、なかでも強烈な日差しが襲いかかる光の洪水のような土地で、果たして人はどのような建築物を構築することができるだろうか。激しい陽光に対抗するかのような巨大な建築物？ それとも光を徹底的に避けたシェルターのような建物？ そうやって思いをめぐらしていくと、空間を開きこむというアラブ・イスラームの手法が、きわめて優れたものだということに気づくのだ。

しかも、いったん開いこんだ空間を、モスクの例に見るように、決して閉じこめたりせず、無限に開かれたスペースへと昇華させること。そのための闇の演出。闇を支配した者だけに許される空間の内部化…それこそが、まさに至福の楽園なのではないだろうか。



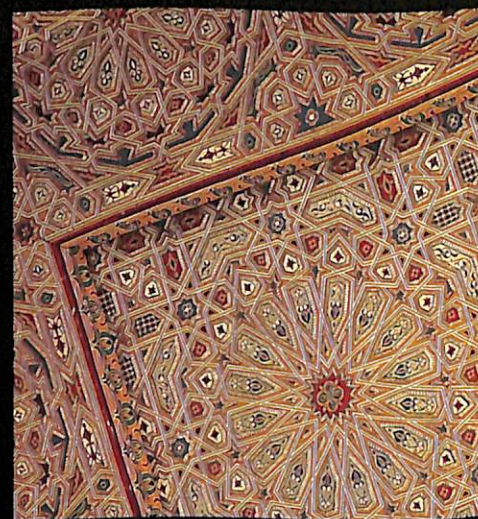
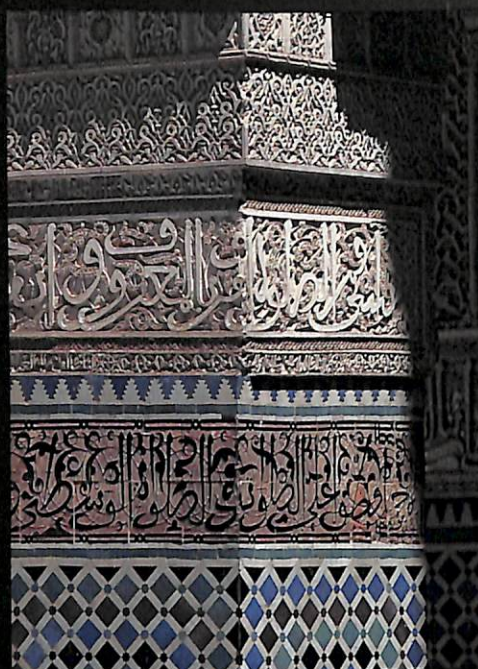
モスクの入り口にある泉水で、からだを洗い浄める。手、足、顔、首…じつに丹念だ
次頁上：カラウィン・モスクの全曜礼拝。間にとけこんだ礼拝室には、メッカの方向に向かって人々が並び、祈りのときを待つ。中庭を囲んだ静寂な空間
次頁下2点共：イスラームの建築を代表するモスクやマドラサは、空間を開いこんで聖なる空間をつくりだす。マドラサ・セファリン(左)とマドラサ・ブー・イナニア(右)



ARABESQUE

連続するアラベスク

モスクの内部を装飾するアラベスク文様。偶像崇拝を禁止したイスラム教が生んだ、この独特の建築装飾は、気が遠くなるような無限の連なりで、モスクをいつそつ壮麗な聖空間へと昇華させる。反復・連続する幾何学模様。美しいモザイクタイルや、スタッコの精緻な浮き彫り。微細な断片が集積されて、無限の神の国へと広がっていくのだ。



次頁共：幾何学模様を連続させて無限を演出するアラベスク。腰壁にモザイクタイル、その上にスタッコ、最上部に木の浮き彫りという三層構造をとるのがモロッコの特徴。複雑なアラベスクは、いまだに手作業でつくられ続けている

参考文献：『地中海のイスラム空間——アラブとベルベル集落への旅』森俊偉 丸善 1992
『イスラム都市』ベシム・S・ハキーム 佐藤次高監訳 第三書館 1990
『イスラム・スペイン建築への旅——薄明の空間体験』栗田勇 朝日新聞社 1985



モロッコの都市と建築を知るキーワード

■メディナ

アラブ・イスラームの伝統的な都市の形態や機能をとどめている旧市街のこと。アラブ人がマグリブ(「陽の沈むところ」という意味のアラビア語で、北西アフリカのモロッコ、アルジェリア、チュニジアをさす)に侵入して建設した都市で、マグリブ地域のメディナはどれも共通した特徴をもっている。いずれも、防御のために城壁に囲まれ、道路は狭く、中央にモスクとスーク、城壁近くに支配者が居住するカスバ(城塞)



上:メディナの内部へは市門から入る
下:城壁の外に広がる共同墓地。墓石はすべてメッカの方向を向いている



とリパート(砦)、城壁の外に共同墓地、という配置。フェズの場合、9世紀建設の旧メディナに隣接して、13世紀に新メディナもつくられたが、両者とも人口が密集する一大迷宮都市。今世紀初頭に植民地化したフランスも手のつけようがなく、別の地に都市建設せざるをえなかったというほどである。

■イスラーム法と建築

メディナの都市構成と建築は、イスラームの原理によって、明確な取り決めがなされている。各施設の配置はもちろんのこと、



覗き込みを防止するために道路側の窓は高い位置につけられている

道路幅や窓の高さ、騒音・振動への対処にいたるまで、こと細かに法規定されているのだ。たとえば、公共の通りの道幅は、荷物を積んだラクダ2頭がすれちがえるように3.2~3.5メートル、高さ3.5メートルを確保すること。プライバシーを守るために、道路側の窓は下枠が高さ1.75メートルの位置。屋上には目隠し用手すりをつける。通りをはさんで向かい合うドアは、互いに真正面にならないようずらして設置する…といった具合。こうしたイスラーム法に基づいて住民間の紛争も解決されていった。

■サーバート

路地の上をまたいでつくられた部屋。一部屋だけのこともあれば、サーバートが連続して路地がトンネルになってしまうこともある。日本ではあきらかに違法建築だが、メディナが建設された当時のイスラーム法



路地をまたいでつくられるサーバート。通行を妨害しないかぎり認められている

では空中権として認められていた。通行を妨害しないように道路の高さ3.5メートルを確保すればよく、通風や日照は害してもかまわないというのだから、早い者勝ちの感がある。当然、街路をまたいで向かいの家の壁を借りてつくるわけだが、支えとして使わせてもらった壁には使用権のみあって所有権はない、という当たり前のような規定までつくられている。

■遮光システム

店舗が密集するスーク(市場)には、強い日差しを遮るための日よけがつけられている



竹の簾を使った日よけはモロッコの特徴

ことが多い。遮光のための方法はアラブ・イスラーム地域でもさまざまで、連続するドームをかけるもの、テントを張るもの、アーチをかけるものなどがあるが、モロッコでは木、竹、植物などを利用するのが特徴だ。フェズのスークでは竹の簾を木の梁で支えるという伝統的な方法がまだ行なわれている。日よけが作りだす網目状の影が美しい。

■マドラーサ

イスラーム法学などを学ぶための高等教育機関で、現在の大学に相当する。イスラームの初期(7~11世紀)はモスクが学問の中心地だったが、やがて図書室や寄宿舎を備



マドラーサ・セファリン

えたマドラーサがモスク周辺に数多く建設されるようになる。フェズも同様で、いちばん大きなカラウィン・モスクが世界最古の大学のひとつとして機能していたが、13~14世紀にかけてマドラーサ・セファリン、マドラーサ・ブー・イナニアなどが次々に創立された。イスラームの宗教建築の特徴がここにも現われていて、なかでも中庭に面して施された精緻な装飾は見事。幾何学模様とアラビア文字(コーランの経文)を組み合わせた腰壁のモザイクタイル、スタッコと木に施された繊細な浮き彫り模様が当時のまま残されている。

■ミナレット(光塔)

イスラームのまちでは、夜がまだあけきらない午前4時頃の礼拝の時報を告げるアザーン(呼びかけの声)で一日がはじまる。モスクに付属する塔=ミナレットから、1日5回この呼びかけをすることになっていて、昔は塔に上ってしていたが、現在はスピーカーが設置されている。ミナレットのかたちもさまざまで、方形、円形のほか、有名なサーマッラー(イラク)のマルウィーヤ・ミナレットのようにらせん状のものもある。石やれんがを積んでつくられるが、表面は華麗なモザイクタイルで装飾されることが多い。

■ミヒラーブ

メッカの方向を示す祭壇風のくぼみ。すべてのモスクはメッカの方向(キブラ)の軸線上に建てられ、その方向を示すミヒラーブのある壁(キブラ壁)に向かって、人々はいっせいに礼拝する。キリスト教の教会の祭壇に影響されてつくられたというが、イスラーム教は偶像崇拝を否定しているため、ミヒラーブには何も置かれず、くぼんだ部分は抽象的な幾何学模様のモザイクタイルで装飾される。大きな規模のモスクになる

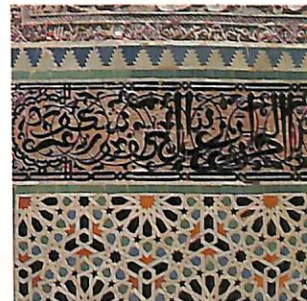


ムーレイ・イスMAIL廟と、その内部にあるミヒラーブ

とミヒラーブの装飾は精緻を極め、蜂の巣状に複雑に入り組んだスタラクタイト(鍾乳石模様)を施したものもある。ミヒラーブはモスクだけでなく、聖者を祀った廟にも設置される。

■アラベスク

「アラビア風」を意味するイスラームの装飾文様。幾何学文様、植物文様、文字文様などを複雑に組み合わせて構成していく。なかでもイスラーム建築を代表するモスクや聖廟はアラベスクのモザイクタイルで覆いつくされ、空間をいっそう無限化する。モザイクタイルをつくる工房は今でもフェズやマラケシュなどに残されており、子供たちが割りだしたタイルの小片を、表を下にして並べ、裏に石灰モルタルを塗って張り

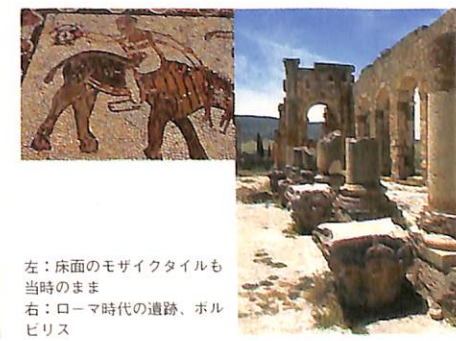


微細なタイルが作りだすアラベスクの美

合わせてつくっていく。タイル表の色や模様を見もしないで素早く並べていく手つきは、神わざとしか思えない。

■ボルビリス

モロッコに現存する最大のローマ遺跡、それがボルビリスである。フェズの西方、クルマで約1時間ほどの、オリーブ畑が広がるゆるやかな丘陵地に、時をとめたままひっそりと建っている。紀元前45年にこの地に攻め入ったローマ帝国の、統治時代の首都があったところで、1915年から発掘・修復が開始された。約40ヘクタールもの広大な敷地に、凱旋門や神殿、公会堂、浴室などの遺跡が続き、現在も修復作業が進められている。圧巻なのは浴室や住宅などの床面を飾っているモザイクタイル。神話にちなんだ図柄の巧みな表現は、とてもローマ時代のものとは思えないほど斬新だ。



左:床面のモザイクタイルも当時のまま
右:ローマ時代の遺跡、ボルビリス